三国湊緑のリレープロジェクト　この土地にずっと暮らしていこう
－湊町の森づくりで、人・生き物・地域・流域の賑わいづくりへ－

特定非営利活動法人三国湊魅力づくりPJ　吉村恵理子

三国湊（福井県坂井市三国町）は、福井県の約７割をしめる九頭竜川水系の河口に位置し、東尋坊を有する美しい海岸部、農業がさかんな丘陵地及び平野、北前船の要湊として栄えた街並みの残る旧市街地の３つのエリアからなっている。

当NPOは、「三国湊の賑わいづくり」「魅力発信」を主軸に、「まちづくり事業」「文化事業」「環境事業」に取り組んでいる。今回紹介したいのが、「環境事業＝三国湊緑のリレープロジェクト＝（通称）みどりリレー」についてである。

「みどりリレー」は、さかのぼること今から14年前におきたロシアタンカーの「ナホトカ号重油流出事故」が契機となっている。「よみがえれ日本海」をスローガンに重油を柄杓ですくいバケツリレーで海を蘇らせたのは、地元住民・全国から来てくれたボランティアの方々・企業・行政による協働体制であった。また、これらを取りまとめたボランティアセンターの運営が評価され、一連の取組は「三国方式」と呼ばれた。10年を経た平成19年、この事故とその取組を再度振り返り、何を学び、これからの循環型地域社会にどう生かしていくか、についてシンポジウムを行った。そこで、松枯れ問題を含む森づくりを通じて、美しい自然景観の創出（三国湊は観光地でもある）や、森を活用した私たちの豊かな暮らしのあり方に取り組むことが提唱され、第二の三国方式を構築していくことも目指していくこととなった。

現代・未来の森のあり方を考え、「賑わいの森」づくりを発展させていくため、「人の賑わい」「他の生きものの賑わい」「地域社会の賑わい」「流域の賑わい」づくりを基本方針とし、「みどりリレー」活動を通じて、環境×歴史文化×観光が連動した総合的で魅力的なまちづくりを目標に取り組んでいる。現在は、三国湊の丘陵地をフィールドに、専門家や地元の名人達に教わりながら、次の事業を実施している。

○森の健康診断・プラン・実際の手入れ

松枯れの伐倒・手入れのための間引き・下草刈り・伐倒木の搬出・処理またはその材の活用・植樹などを地元住民・専門家と共に実施。

○ヨソモノ・ワカモノ・地元住民と緑をつなぐ「三国湊型ワークキャンプ（最大１週間）」の実施

1月に実施した森の手入れ

共同生活をしながら、専門家による森づくり技術の習得と地域活性化に寄与する森づくりについてグループディスカッションを行い、多面的な森づくりを行う。

達人と一緒に木登り体験

○これからの森の賑わい×人の賑わいづくりとして、間伐材等を用いた「きのこの森づくり」「ツリーハウスや遊具づくり」「遊歩道づくり」「炭焼き窯づくり」等をWSスタイルで実施。

○九頭竜川水系のゆるやかなネットワークの見える化、様々な団体からの寄稿による「ミクマリ通信」を発行。

○九頭竜川水系ネットワークづくりに向けてのシンポジウム「ミクマリ会議」の開催

○みどりリレー募金　　三国町内に募金箱を設置。三国の海水を煮つめてつくった「塩」や間伐材でつくった小物などが購入できる試み。

「みどりリレー」が始まって今年で３年目であるが、特に活動当初は失敗や苦労も多かった。フィールドを借りるということの難しさ（山主さんの大きな心があってこそ！）、木を伐採するこわさ（一度切ったらもう元には戻らない…）、里山や自然に対して自分達はどう考え行動していくのかといった意識共有の難しさ（思いも考え方も十人十色！）。他にも、参加者の安全や、直接参加だけでなく、興味を持ったり応援してもらえるような間接的理解者を増やしていくにはどうしたらいいか…等々。よく、まちづくりは人づくりだと言われるが、そこに「自然」が深く関わってくると、ずしんとより重い何かがのしかかってくる気になってしまうことがある。「自然環境をよくしたい」と思うこと自体がおこがましいのではないかと悩むことも。一方で活動を続けていけばいくほど、コアに取り組むスタッフを増やしていきたいのだが、これもまた資金面からなかなか難しい。それでも森づくりに興味がなかった若い世代の協力を得ることができ、丘陵地だけでなく、三国湊全体の魅力を感じてもらえ、リピーターに繋がってきた。県内外の方々から学ぶ機会や、情報交換の場も増えてきた。

里山づくりの担い手不足、土地所有者の高齢化、専業農家の減少による耕作放棄地増による里山の荒廃化といった問題は日本各地で抱える課題であると思うが、解決策とその過程は、その土地に暮らしていく人々が、どのように暮らしていきたいかという今日明日への思いと、その土地の風土等が密接に関わっていると思う。「みどりリレー」の森づくりは、これからも三国湊に根をはって、九頭竜川水系を視野に、コツコツと楽しみながら活動をしていきたい。

富田林寺内町かいわい「地域資源と人材」を活かした空き家活用プロジェクト

富田林駅南地区まちづくり協議会　事務局支援コンサルタント　新田文子
（株式会社ダン計画研究所）

■歴史とまちなみの裏に抱える問題

大阪府富田林市富田林駅南地区は、府内で唯一の重伝建地区「富田林寺内町（じないまち）」で知られる。地区南側に石川が流れ、歴史と自然の織りなす趣のある景観に触れることができる。

古くから南河内地域の中心的な市街地であり、交通の結節点、玄関口としての役割を果たしてきたが、戦後、市内・周辺部でのニュータウン開発や、幹線道路を中心としたスプロール開発の進行により、周辺地域における中心性は低下した。少子高齢化、人口減少、商業の衰退によるまちの空洞化等、全国の歴史的市街地が抱える同様の課題に当地区も直面する。現在、地区内（約31ha）の人口は約3.5千人、65歳以上の占める割合が3割を超える。

■空き家活用事業・LLPまちかつ

平成17年3月に都市再生整備計画に基づく「まちづくり交付金事業」の採択を受け、駅前広場の整備、駅から寺内町へのアクセス道路の整備等のハード事業と共に、市民参加のまちづくりを進めていく基本方針が定まった。地区の課題に対して、寺内町と周辺地区が一体となって取り組むべく、平成20年1月、住民、商業者、まちづくり団体、行政等からなる「富田林駅南地区まちづくり協議会」が設立された。活動の柱の一つは「空き家活用」である。地区内の空き家・空き店舗の増加は、コミュニティの維持に関わる深刻な問題であり、防犯面、伝統的まちなみの維持保全面での危機感が高まっていた。

平成20年度は、地区内の空き家等の分布調査、空き家を活用した1週間の社会実験を実施。平成21年度には、地域住民、商業者の有志6名からなる空き家活用の専門組織「LLPまちかつ（有限責任事業組合町家利活用促進機構）」が立ち上がった。LLPまちかつは、入居希望者を募集し、活用意思のある空き家所有者との橋渡しを行う組織である。前年度の活動の中で、活用意思のある所有者を発掘できたことから、その空き家をモデル物件とし、協議会・LLPまちかつが連携して活用までの一連のサポートを行い、平成22年3月、地区内に新たな店舗（3店舗）がオープンした。

LLPによるマッチングの様子

■「アート・工房のまちづくり」

空き家を活用した店舗

平日の人通りが少なく、飲食・物販店が営業を続けるには厳しい立地であるため、入居希望者の募集・誘致に当たり、主な対象を、寺内町かいわいの歴史・まちなみに調和するものづくりの作家・アーティスト等（自ら製造・販売する者）とし、「アートと工房のまちづくり」をテーマに空き家活用を進めている。

平成21年9月（LLPまちかつ発足時）～23年2月の間、面談・マッチングを27件行い、そのうち5件のマッチングが成立した。入居希望者からの問い合わせは、月平均1，2件と、募集を始めた当初の想定よりも「アートと工房」を打ち出した空き家活用に対しての、地域外からの反響は大きく、当地区の空き家の価値を、地域の人々が再認識する契機ともなった。

■空き家活用により変わるまち・ひと・意識

協議会、LLPまちかつの取り組みにより、空き家を活用する仕組みが整い、地域内外に浸透しつつある。一方で、住民、建物所有者、地権者等の当事者の参加・協力は十分ではなく課題が残る。

空き家は「目の上のたんこぶ」ではなく、「地域の未来を切り開く資産」である。その認識を住民等の当事者がもち、空き家活用を通じて、地域を変えていくプロセスに主体的に参加する仕組みを構築していくことが、空き家活用のセカンドステップと考える。

こやだいら住民まるごと地域力向上事業

木屋平水源の里協議会　会長　阿部義則
（NPO法人こやだいら理事長）

■地域の課題

私たちが活動する徳島県美馬市木屋平は、県のほぼ中央に位置し、平成17年３月の広域合併で３町１村が市となった。その１村が木屋平地域である。市中心部から約40㎞離れた山間地で、まるで陸の孤島である。地域の面積は約100㎢、（内森林面積95％）、461世帯、人口913人、高齢化率52％と「過疎化」「少子高齢化」が極度に進み、一人暮らしの高齢者が増加している。しかし、ここに住み続けたいとの意志は強い。限界集落の増加、自治会活動などの希薄化、日常生活の不便、防災力の低下、伝統文化の衰退、生活物資確保の困難等の課題を抱えながらも日々の生活を営んでいる。

■取組内容

平成19年12月「NPO法人こやだいら」を立ち上げた。既存の地域づくり実行委員会と協議を重ね、互いの長所を活かすべく、平成20年９月に「木屋平水源の里協議会」を設立し、同20年度に国土交通省の『新たな公』によるコミュニティ創生モデル事業の認定を受け、地域を元気にするための活動の基礎を構築するための調査・研究・試行をさせていいただいた。この事業を基に、①「過疎地有償運送事業」では、交通弱者の移送と診療所の通院や検診、買い物、地域の会合や地域外への移動等の送迎。②「高齢者生活支援事業」では、訪問や電話による安否確認、情報提供、生活相談等の活動。③「農林業作業支援事業」では、森林の伐採や間伐、果樹の収穫、草刈り、耕耘等。④「防災活動事業」では、自主防災会と連携し、机上訓練など。⑤「清掃活動事業」では、地域内の国道から集落道、河川等周辺の清掃活動、不法投棄の監視や啓発、看板の設置等。⑥「地域おこし事業」では、伝統芸能（傘踊り・木屋平太鼓・廻り踊り）を小中学生等に指導。「緑とふれあい夏祭り（帰省客との交流）」、地域住民全員参加大運動会の実施。⑦「自然保護活動事業」では、希少植物（キレンゲショウマなど）の鳥獣（シカ・カモシカ等）の食害により激減しているため、調査や個体の増殖を実施。⑧「観光資源掘り起こし事業」では、観光地の再生、案内看板の設置など。

■取組の効果

●人の流れと明るさが戻り、住民が元気になった

高齢化が進むにつれ、人々の日常的な交流は薄れてきていたが、これは個々の移動手段の難しさが大きな要因であった。そこに、過疎地有償運送事業が的を得たといえる。域内唯一の診療所での検診、高齢者の生きがいづくり活動、市の中心部への買い物、親戚等への用務等、これまで「高齢だから」「車の運転ができないから」などの理由で閉じこもっていた人たちの動きが増えた。移動が可能になり人とふれあい、交流する機会が増えると、元々団結力・相互支援意識が強かった地域だけに、防災訓練、自治会活動、伝統芸能の伝承活動、イベントなどへの参加者が増えるという相乗効果につながった。また、行政や地域の情報が伝わりやすくなり、生活の楽しみが増え、振り込め詐欺などの被害防止にもつながっている。

こういったことは、ふるさとに高齢者を残し離れて暮らす家族にとっては「安心して地域に任せられる」「帰省するのが楽しみ」「ふるさとをいつまでも残してほしい」などの意識に転化してきた。

●まとめ

木屋平は「陸の孤島」であるが「住み続ける」人がいる限り、また木屋平を「ふるさと」との思いをもつ人がいる限り、「団結と絆で支え愛」を合言葉に、将来に夢と希望のある地域づくりを行っていきたい。

過疎地有償運送事業（送迎）

高齢者生活支援事業（安否確認訪問）

地域づくり事業（伝統文化の継承）

市民参加の古代官道調査・活用事業

特定非営利活動法人鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会　理事長　石井幸孝
（元 九州旅客鉄道会長）

都市部から過疎地まで、どこも住民の連帯感やコミュニティが希薄だ。生活周辺に大人から子供まで関心の持てる新鮮な話題が必要である。「古代官道」はこれらの地域をつなぐ歴史文化遺産である。

■驚くべき「古代官道」1300年前のハイウエィ

1300年前に律令国家によって造られた幹線道路網「古代官道」は、奈良・京都と大宰府・鴻臚館が拠点で、全国６，300キロ（今の高速道路と同じくらい）、道幅12mの直線道路という、驚くべきスケールだった。中央と大宰府を結ぶ山陽道は大路、東海道、東山道は中路、その他は小路とされ、約16km毎に「駅家」（うまや）が置かれた。馬を大・中・小路の駅家に、20・10・５頭づつ配置し、これを乗り継ぐ早馬移動をした。大宰府から畿内まで６日ほどで飛ばした。11世紀頃には官道の制度も廃れるが、今でも痕跡道が国道等に使われている。隋・唐の制度に範を得ており、遠くローマ帝国の「すべての道はローマに通ず」も同じ発想である。

新公W２６　大宰府・鴻臚館・博多津古代官道ルート（福岡・筑後地区）

九州は大宰府を中心に古代官道のメッカ

■「新たな公」に格好のテーマ

この驚くべき事実が明らかになったのは、ここ40年位で、開発や道路工事での古代道路遺構の考古学的調査によってであった。古代官道に対する関心・調査・研究は従来専門分野の学者・行政・教育委員会（文化財担当）の域を出なかった。古代官道によって育まれた道や集落があり、先祖代々住んできた地域住民にはまったく知られていなかった。市民がもっと主役になって取り組むテーマではないかと考えた。昨今の歴史・ウオーキングブームにも繋がり、地域活性化に貢献するだろう。この「公」的なテーマが「官」と「学」の専門分野から「民」参加型に発展することはまさに「新たな公」の格好のテーマと考え、太宰府市のNPOと協働で提案し、平成20・21年度モデル創生支援事業として取り組んできた。

「市民フォーラム」（勉強会）、「フィールドワーク」（現地踏査）、「市民シンポジウム」（市民発表会）、「ワークショップ」（住民対話式調査）、「スクールフォーラム」（中学生勉強会）と多彩な取り組みを行った。また易しい古代官道読本『1300年前の高速道路』も作成した。予想以上の市民の参加と反響があり、このテーマが持つ潜在的な魅力と将来性を感じた。また「古代交通研究会」などの専門分野の幹部からも新しい発想として評価された。

「古代官道」フィールドワーク

子供も読める「古代官道読本」作成

■全国で着目されブームになることを期待

残念ながら２カ年間でこの事業が中断、昨年は「道守九州会議」での基調講演報告等アフターケア活動を行ってきた。まだまだ地域に認知されていない新しいテーマ「古代官道」と新しい発想「新しい公共」である。この事業の自力での再構築を模索中であるが、道なるが故に連携プレーのできるロマンに富んだテーマであり、政府、ならびに中央、地方の機関や市民団体において着目され、広く「市民参加型の古代官道事業」が芽生えブームになることを切に期待する。今日までの経験を活かして喜んで協働するなり、お手伝いしたいので、皆さんの反応をお待ちしている。